

<p style="text-align: center;">元 氣 の 源 通 信</p> <p>人事労務・社会保険等手続き・助成金・給与計算</p>	<p>社会保険労務士 深川 順次 福岡市東区香椎4-11-17-201 TEL 092-661-0552 FAX 092-661-0582</p>
<p>(今月の言葉)</p> <p>① 選手と徹底的に対話する (コミュニケーションは声かけから始まる) ② 個性あふれるチームをつくりファンに喜んでもらう ③ 固定観念にとらわれない</p> <p style="text-align: right;">(渡辺久信「寛容力」から)</p>	

2008年12月号 (第77号)

4年ぶりの日本一奪取!

ご存知のように、西武ライオンズが巨人との死闘を制し頂点に上りつめました。開幕前の下馬評は本当に低かった。昨年は松坂が抜けて26年ぶりのBクラスに転落しました。しかも今年は中心バッターとして活躍していたカブレラ、和田さえも抜けています。文字通り若い選手たちを活かしての日本一でした。(これがセ界を制した原巨人軍と全く違うところです)

今年の西武ライオンズは強かった。ほとんど他を圧倒していました。それを率いたのが1年目の渡辺久信監督です。では彼はどのようにして日本一に導くことができたのか。ある意味幸運もあるでしょう。しかし彼の著書「寛容力」を読むと日本一に導いた理由がよくわかります。なるほどそうだったのか!と。

それは企業経営にも大いに参考になるものです。

(来年がちよっと危ぶまれます。なぜなら日本一に大きく貢献したコーチのデーブ大久保が女性問題でフロントに配置転換になったからです。「寛容力」を読むと、デーブ大久保の果たした役割がいかに大きいかがわかります)

西武ライオンズを日本一に導いた 渡辺久信監督に学ぶ

選手と徹底的に対話する (コミュニケーションは声かけから始まる)

渡辺監督がまず方針としたのは、「徹底的に選手と話す」ということでした。それを昨年の秋季キャンプから実践します。まず実践したのは選手への声かけでした。

「ウォーミングアップ中の選手に声をかけたら、バッティング練習の順番待ちをしている選手に調子を聞く。次に外野でジョギングをしている選手と一緒に走りながら話を聞いたら、ブルペンに行って投球練習を見て、こちらの考えを伝える」

こうして、渡辺監督は選手との「心の距離」をぐっと近づけていきます。

ではなぜ、選手とのコミュニケーションが大切か。彼は次のように述べています。

「その選手の性格をつかむことで、もっとも効果的な接し方を模索していく必要があるからです。その選手が何を考えて、どのように行動しているかわかるようになり、それにより適切な接し方をできるようになるのです」

たとえば中村選手、通称「おかわりくん」は、きびしく接するのではなく、ほめてのびのびとやらせたほうが、力を出すタイプだと言います。ご存知のように彼は今シーズン46本で本塁打王に輝きました。過去2年間は10本も打てなかった。文字通りの全面開花です。それはともかくとしまして、渡辺監督はコミュニケーションなしには選手を活かすことはできないし、コミュニケーションは声かけから始まるということを見事に実証しました。

またコミュニケーションのやり方として、以下のことを心がけています。

- ① 頭ごなしに怒らない。
- ② 自分の物差しで選手を測らない。自分を押し付けない。
- ③ 具体的な目標を与える。
- ④ 個人ミーティングを行う。

個性あふれるチームをつくりファンに喜んでもらう

渡辺監督が、勝利以上に大切にしたいのが、ファンに再び足を運んでもらうことです。魅力あふれるチームにしたいということでした。

07年のチーム状況はどん底でした。裏金問題でフロントは大揺れ。成績は26年ぶりのBクラス。客離れが起こり、12球団最低の観客動員数でした。これをなんとかしたい。

秋季キャンプから一貫して取り組んできたのが「打者は2ストライクまでは自分のスイングで振り切る」「投手は結果をおそれず、自分の投球を貫く」という方針です。選手が思い切ってプレーをする。それが爽快な野球につながり、ファンにも喜んでもらえると考えたわけです。この方針が、若手選手がのびのびとプレーし活躍する素地をつくりました。なんとホームラン数は12球団ダントツの198本を叩き出しました。(ちなみに2位は巨人の177本、3位がオリックスの152本となっています)

若手選手がのびのびとプレーするためにもう一つ心がけたのが、「失敗しても試合中は選手を絶対に責めない」ということでした。これをコーチ陣に徹底したといいます。なぜか？

試合中に責めると、どうしても萎縮してしまいお客さんを呼べる「個性」を発揮できなくなるからです。「ミスをしてしまった。取り戻さなければ」と当の選手が一番思っている。だから選手に目の前のプレー、打席に全力で集中させることが大切。反省はあくまでも試合が終わった後でいい、という方針を貫きました。そのことによってミスした選手が試合後半に活躍し勝利した試合も多々あったと言います。

固定観念にとらわれない

もう一つ、今回の西武ライオンズの快進撃を支えたのが、固定観念にとらわれない野球です。それを最も象徴しているのがデーブ大久保の打撃コーチ就任でしょう。

渡辺監督は就任すると真っ先にデーブへコーチ打診を行っています。しかし周囲の反応は冷たかった。「タレント出身じゃ選手になめられる」「大久保はやめておいたほうがいい」などなど。

だが「ライオンズを明るく、強いチームにするにはこの男しかない」渡辺監督は、デーブ大久保の長所を見抜いていました。明るいキャラクター、「誰にも負けない野球に対する真摯な態度」そして若手選手を情熱を持って引っ張りかつのせることができる指導力などです。ホームランの魅力がたっぷりつつまった強力打線を作ったのはデーブ大久保の功績でしょう。

アーリーワークで動く体をつくる

それだけではありません。優勝の原動力の一つになったのが「アーリーワーク」だと言われています。その「アーリーワーク」を渡辺監督に進言したのもデーブ大久保でした。

7時にグラウンドに出て朝食前に打撃練習やウエイトトレーニング、バットの素振りなどを行います。朝食後に1時間以上の休みをとり、その後メインの練習を行い午後5時にはすべてのプログラムを終えるというものです。デーブはメジャーを視察する中で、すぐれた練習方法と実感し提言したわけです。

選手たちはアーリーワークにより、どんどん動く体になっていき、しかも今までの夜間練習につきものの怪我也少なくなっていました。更に5時にすべてのプログラムが終了するので、ゆっくりと夕食をとることができ、また選手間のコミュニケーションも活発になったと言います。

選手個人の「特製カルテ」づくりで指導を強化

これを発案したのも大久保です。特性カルテとは、1軍、2軍のかかわらず野手全員の指導内容や体調、その当時の打撃の課題などを顔写真付きの1枚の書類にまとめたものです。これをつくることによって、個人に対する指導内容が飛躍的に高まりました。同時に指導部の意識の変革をも生み出してきました。「首脳陣、コーチ陣が今まで以上に一人ひとりに注目して毎日を過ごすこと」になったと言います。

現在、この特製カルテを定期的にチェックすることにより、チーム全体の情報共有と長期的・計画的な選手育成に役立っています。

こうして渡辺監督は、デーブを活かし若手を活かし、ライオンズを頂点に導いたのです。